仏典翻訳の歴史とその変遷 ④

天理教海外部翻訳課
天理大学非常勤講師
成田　道広　*Michihiro Narita*

渡来僧と訳経

ガンダーラ地方で発見された現存最古の仏典写本の断片には、伝統部派の写本とともに『般若経』など大乗のものとされる写本も含まれていた。それらの断片は炭素年代測定法により前１～８世紀ごろのものであると判明した。同じ地域から部派仏教と大乗系の写本断片が発見されたという事実は、大乗教理がその起源から大衆部、説一切有部、法蔵部などの伝統部派の出家者らによって伝承されていた可能性を示している。調査を行ったリチャード・ソロモンは、暫定的ではあるが、大乗は主流の仏教と共存し、伝統部派の内部に存在していたと結論付けている（Allon and Salomon, 2010：11-22）。

伝統部派は釈迦の遺訓に基づく律蔵を踏襲し、出家者の生活全般を規定していた。中国仏教における律蔵の欠如を嘆く多くの中国人僧らは、インドに大乗教団の存在とその律蔵を想定し、大乗律を求めてインドへ渡った。そのうちの一人、法顕（339～420）は 399 年に長安を出発しインドに辿り着いたが、大乗律を発見できず、大衆部の律蔵を大乗の寺院で入手し持ち帰った。そのことから、大乗教理が主流の僧院内でも伝統部派に属する律蔵が踏襲されていたということがわかる。おそらく当時、インドにおいて律蔵は未だに律師による口伝によって伝承されることが多く、大乗教団そのものも未だ独立した教団として確立していなかったので、独自の律蔵を有していなかったとも考えられる。また、671 年に海路でインドに向かった義浄は、『南海寄帰内法伝』に「四部之内、大乗小乗区分不定」と記しており、その記述から、伝統教団内における大乗と小乗（部派仏教）の区別が明確ではなく、大乗が組織としてではなく思想として伝統教団の内部で広まっていたと推測できる。小乗とは、伝統部派側が自称したわけではなく、大乗から見た蔑称であり、法顕や義浄をはじめ中国人僧らが大乗を重要視していたことがわかる。

中国では紀元前後にすでに大乗教団が組織化され、初期の頃から仏典の漢訳が行われていたようだ。インド系諸言語を直接理解できない中国人仏教者にとって、仏典漢訳は必要不可欠であった。

文献学的には、大乗経典が創作された１、２世紀には、中国において既に訳経が開始されていた。大乗経典創出と漢訳の時期が重なっているということは、漢訳仏典には、インド周辺で発見されている最古の仏典よりもさらに古い教理などを反映している可能性すら想定できる。したがって、プラークリットやサンスクリットの仏典だけを原始仏典と称するのは誤謬であるといえよう。大乗仏教の組織化が中国においてインドより早く進んでいた事実などを考慮すると、インドから中国へという流れだけではなく、逆に中国からインドへの思想的な影響をも再考する必要があると思われる。

そのような背景から、近年、古代漢訳仏典の再評価がなされている。インドと中国は距離的にも文化的にも大きな隔たりを有している。その隔たりを乗り越える媒体となったのが訳経であった。仏教東漸の後、漢訳によって古代インドの仏教思想は中国に橋渡しされ、両地域の思想交渉が始まった。

中国における仏教伝来は、後漢の永平 10 年（西暦 67 年）とされているが、実際にはさらに古く紀元前後であったようだ（水野，1990：130）。とはいうものの、伝来当初は中央アジアからの移民や商人がその担い手であったと思われる。おそらく彼らは中国でも母国語である西域の諸語で教理を理解し信仰していたが、二代三代と代を重ねるうちに、母国語での意思疎通が次第に困難となり、中国語による教理伝承が必要になったのではないかと考えられる。さらに彼らが代を重ねたその頃には、仏教に対する関心がすでに漢人にも広まり、仏典漢訳がますます要請される事態となった。仏典漢訳の濫觴（らんしょう）には、中央アジアからの渡来人の世代間信仰伝承と、漢人の仏教理解の切望という二つの要因があったと考えられる。

漢訳とは文字通り古典漢語に翻訳することを意味する。伝統説によると、中国における漢訳は後漢の明帝の永平年間の洛陽における摂摩騰（しょうまとう）訳『四十二章経』から始まったとされる。摂摩騰は、カーシャパ・マータンガというインド人の名前の漢訳である。しかしこの説は神話の域を出ず、史実としては桓帝（在位 146～167）の時代に洛陽で訳経をはじめた安世高（あんせいこう）が最初の漢訳者であると考えられている（船山，2015：22-24）。

安世高の安は安息国（パルティア）出身を意味する。彼は安息国王の正后の子で、幼少期から諸学に優れ、超人的な才覚の持ち主であったという。安息国はイラン系の国家で当時から中国と交易が盛んであった。彼は王位を捨て出家修道し、中国へと渡り訳経僧として活躍した。安息国ではイラン系言語のみならず、インド諸語も用いられていたので、彼はインド諸語の仏典に精通し、また、中国語の知識も多少あったようだ。まさに、仏典漢訳には最適の人物であった。しかし、未だ中国人の仏教の知識は乏しく、漢訳の際、中国人協力者の教理的言語的サポートもたよりないものだったと思われる。さらにインド諸語と中国語という言語的な相違も影響し、彼の翻訳には様々な変遷と紆余曲折がみられる。たとえば、同一の術語に対して様々な訳語が充てられ、翻訳上の混乱があり、漢訳の困難さと彼の苦心が容易に読み取れる。ただ、後に編纂された『高僧伝』などでは、彼を神秘的な聖人として尊崇する描写が多く、彼の貢献は後代の訳経僧にとって大きな励みとなったと考えられる。特に不翻訳語を必要最低限にして、理解しうる翻訳を心掛け、積極的に漢語への変換が試みた努力が垣間見える。その結果、教理解釈の面で後代の訳経僧に大きな影響を及ぼしたようだ。彼は大乗経典成立以前の伝統的な経典を多く翻訳しており、文献学的にも初期大乗仏教との関連性が注目される。

このように中国における訳経は、漢人ではなく、まずインド諸語に精通した安世高など西域からの渡来僧によって始まったとされる。地理的にも文化的にも大きな隔たりを有する両地域をつなぐシルクロードに位置する西域の出家者らは、伝道の媒体として身命を擲（なげう）つ覚悟をもって中国へ渡り訳経に取り組んだのだろう。彼らの訳文には、異国の地で伝道に生涯を捧げた不惜身命の覚悟とその生き様が刻まれている。

［引用文献］

船山徹『仏典はどう翻訳されたのか―スートラが経典になるとき』岩波書店、2013 年。
水野弘元『経典―その成立と展開』佼成出版社、1990 年。
M.Allon and R.Salomon. “New evidence for Mahayana in Early Gandhara,” *The Eastern Buddhist*, vol.41-1, The Eastern Buddhist Society, Kyoto, 2010.